

(様式 3-1)

平成 29 年度 プロジェクト研究費研究実績報告書

平成 30 年 5 月 10 日

代表者 綿井 雅康

研究課題名	自己アセスメント型心理教材を用いた「生きる力」育成モデルの検討
研究期間	平成 28 年 6 月 1 日 ~ 平成 30 年 3 月 31 日
共同研究者	
1. 今年度の研究概要	
<p>【目的】</p> <p>本研究の目的は、中学校生徒を対象として自己アセスメント型心理教材を継続的に活用する教育的な実践が「生きる力（生徒の自律性・心理的柔軟性）」の育成に寄与しうることを実証しつつ、その過程モデルを検討することである。研究代表者は、自己アセスメント型心理教材の開発に携わってきた(菅野・綿井, 2002; 菅野・綿井・加藤(編), 2012)。そのなかで、本教材の中核である「精神的充足・社会適応力」評価尺度の測定結果が、生徒の学習意欲・ストレスコーピング・学級集団への協調性との関連が深いこと、および測定結果が生徒理解・学級経営の有効な資料になること実証してきた。こうした成果を踏まえ、本教材の活用が「生きる力（生徒の自律性・心理的柔軟性）」の育成に寄与していることを実証していく。</p> <p>また、本研究は平 28 年度より開始して 2 年目にあたる。本研究は、本学の地域連携活動を踏まえ、新座市教育委員会(教育相談センター)および新座市内の中学校との連携活動の一環として展開している。研究活動を展開すること自体が、教員の生徒理解に関する資質を向上させること、および、生徒の自己理解や成長に資する側面がある。さらに、複数年にわたって本研究を継続するなかで、教材活用が生きる力育成に寄与する過程モデルの構築と検証を行う予定である。</p> <p>【方法】</p> <p>(1) <u>自己アセスメント型心理教材の実践</u>: 平 28 年に研究連携校となった新座市内の 2 つの中学校に継続して協力を得て、第 2 学年を対象として心理教材の実践を行った。一方の F 中学校の第 2 学年 (162 名) は、第 1 学年時にも心理教材実践および「生きる力」測定を反復実施している。他方の S 中学校の 2 学年 (175 名) は、一部の学級については、第 1 学年時に教材実践と測定を 1 回実施している。本年度の本研究では、両校とも、7 月上旬に 1 回目の教材実践を行い、3 学期に 2 回目の実践を行った。いずれの教材実践ともに、各校の学級担任に、教材の指示書に従って実施するよう依頼した。</p> <p>(2) <u>「生きる力」測定</u>: 本研究の目的に従い、本年度の研究における「生きる力」は、心理的柔軟性に焦点をあてた。そこで、中学生のレジリエンスを測定した先行研究(石毛ら, 2006; 平野, 2010)が開発した尺度の項目を参考に、測定項目を整理した。具体的には、問題解決、自己理解、否定受容(逆転)、意欲、内面共有、楽観の 6 領域、計 23 問からなる項目を用意して、質問紙を作成した。心理教材の回答結果が返却された後に本質問紙に回答させた。また、質問紙には、心理教材に対する理解、尺度測定結果に対する評価なども、別の問として計 10 問に回答させた。いずれの回答も 5 選択肢からの択一選択回答方式を用いた。</p> <p>(3) <u>心理教材の測定結果に関する検討会の実施</u>: S 中学については、8 月下旬と 1 月中旬に、心理教材の評価尺度への回答結果(学級単位での集計結果、各生徒の回答集計結果)について、学年担任団全員と代表研究者の間で、学級単位での情報交換を行った。情報交換を行うにあたり、研究者は回答結果を分析し、学級全体の様子、前回の実践からの変化、個別に配慮を要すると推測される生徒の結果分析などを用意して、検討会に臨んだ。検討会では、分析結果を説明するとともに、学級担任などから学級および個別生徒の様子に関する報告、および今後の指導に関する意見交換を行った。一方、F 中学校については、S 学校の実践結果と同様に、研究者が回答結果を分析し、その内容を管理職に文書化した資料として引き渡した。</p>	

2. 研究の成果

本研究に関して現時点(平30年4月末)までに分析を行った内容は、本年秋の日本教育心理学会第60回総会にてポスター発表を行う。すでに発表原稿を提出済みであり、その原稿を添付して提出する。

また、現時点では、本研究の目的に即して、心理教材の反復実施が「生きる力」の育成に寄与する、という仮説を検証するためのデータ分析を実施している過程である。反復効果の単純な検証分析は次の通りである。「生きる力(レジリエンス)」測定のための23問の構造を確認するために因子分析を行った。2つの中学校での2回の回答のうち有効回答674名分の回答データを対象に、主因子法・プロマックス回転による因子分析を繰り返し実施した。因子分析を繰り返したのは、因子抽出後の共通性の値が低い、および複数の因子に対する負荷量の値が同等となった質問項目を順次除外したためである。最終的には、16項目による3因子が抽出された。各因子に対して負荷量の大きかった質問の内容から因子名を命名した。第1因子は「意欲的態度」、第2因子は「内面共有」、第3因子は「楽観」である。質問16項目を3つの因子に分類して、各生徒の回答をもとに因子得点(項目回答得点の平均点)を算出した。各質問への回答の得点変換は、「全く当てはまらない」:0点から「とてもよく当てはまる」:4点とした。学校別および実施回数別に、各因子の得点を集計した結果が次の表である。

表「生きる力(レジリエンス)」測定結果の比較

因子	F中学校		S中学校	
	1回目	2回目	1回目	2回目
第1:意欲的態度	2.52 (0.66)	2.61 (0.68)	2.40 (0.68)	2.40 (0.69)
第2:内面共有	2.36 (0.94)	2.46 (0.99)	2.23 (1.03)	2.25 (0.97)
第3:楽観	2.11 (0.85)	2.15 (0.91)	1.94 (0.90)	1.87 (0.85)

注)上段は平均値、下段()はSD

この集計結果からは、F中学校では、「生きる力」の3因子ともに得点が上昇しているように、一方、S中学校では、全く変化していないととらえることもできる。

しかし、「生きる力」測定の質問紙では、心理教材に対する理解や回答結果に対する評価、また心理教材の結果そのもの様子も加味した上で分析する必要がある。反復測定による回答者の整理(心理教材の実践、測定への回答の2回分に全て参加した生徒のみの抽出)を行った上で、本研究の仮説を改めて検証するための分析を行う予定である。

3. 研究成果の公表実績・予定(年月日、方法)

日本教育心理学会第60回総会(慶応大学、平30年9月、ポスター発表を2件)